The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	伊勢の涙
Author(s)	加藤, 雄一
Citation	詞林. 1998, 24, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67419
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

伊勢の涙

加藤　雄一

一、はじめに

『伊勢集』は巻頭に長大化した詞書を持ち、異同の甚だしさと、物語性を有する為、従来の研究は諸本研究と伝記研究に力点が置かれていたと思われる。しかし、近時、平野由紀子氏[1]、関根慶子・山下道代両氏[2]が手懸ける全訳注の公刊が続き、改めて歌集部分への検討を促す状況が生まれてきた。この研究成果を踏まえ、伊勢歌の内実を明らかにするのが目的である。

そこで本稿では、「涙」という歌語に着目し、表現の特質の一端を述べてみたいと思うのだが、何故に「涙」詠を考察の対象とするのかを記しておこう。【表1】は『古今集』入集歌数上位十名の歌人において、それぞれの家集で「涙」が詠み込まれている歌数を一覧にしたものである。ここではおおまかな傾向をつかめさえすればよいので、便宜上『新編国歌大観』所収のテキストから機械的に「涙」という語を含む歌をカウントした。それと同時に、「涙」を含む歌数の家集全体か

【表1】

歌人	貫之	躬恒	友則	忠岑	素性	業平	伊勢	敏行	小町	興風	深養父
総歌数	八九九	四八二	七二	一八六	六五	八二	四八三	二四	一一六	七四	六五
涙歌数	三七	一	四	九	三	二	四七	二	五	五	五
発現率	四三	二	五八	四九	四七	二六	一〇〇	八五	四五	七〇	七九

ら見た割合を、『伊勢集』を一〇〇として、併せて表示した。例えば『貫之集』は『伊勢集』の二倍の歌数を有するが、「涙」の歌は『伊勢集』所収歌数よりも少なく、その発現率は半分にも満たない。[3]

以上の予備的調査から伊勢は「涙」という語をどの歌人よりも意識していたとは言えないだろうか。つまり伊勢がありふれた歌語・「涙」をどう歌に詠み込んだかを考察することで、伊勢独自の表現をそこに見出だし、又、伊勢という歌人の内実にこそ「涙」という語に執着する必然が存在したのではないかという見通しを立て述べていくことにする。

二、「涙」詠に関する先達の研究

「涙」は歌語として不可欠なものではあるが、それ自体を取り上げた論攷は少ない。佐々木民夫氏[4]は『万葉集』中にある十九首の「涙」詠を分類し、中でも「涙のごはむ」「涙ぐましも」という独創的な表現を以て「涙」を詠出した大伴旅人（十九首中三首が旅人歌）を「涙の歌人」としている。また神谷かをる氏[5]は、「涙」の表現が、『万葉集』から『古今集』へどう変遷したかを論じ、就中、「涙」と言う語が和歌に取り上げられたのは漢詩文の影響が大きいとし、その例証を行っている。

国語学の立場からは小林澄子氏[6]が「涙」と結びつく動詞（特に「流す・流る・落とす・落つ・こぼす・こぼる」）を上代から中世の各ジャンルにおける分布状況を報告し、文体論と関連付けて論じている。

これらの先達の研究に導かれつつ、本論に入ろう。

三、こぼれる涙

涙が出る現象を「泣く・流る・落つ」という動詞と結びつけて表現するのは『万葉集』以来常套となっている。このことは先達の研究により明らかにされていることではあるが、『古今集』時代には他に次のような例を看取出来る。

(1)世の中の常のこととやおもふらんなみだもことにわきていづるは　（民部卿家歌合・二〇）

(2)こひわひていづるなみたのつきせぬははるのなかめといつれまされり　（躬恒Ⅲ・二四〇）

(3)ををよりてかひなきものはおちつもるなみだのたまをぬかぬなりけり　（土左日記・四〇）

(1)(2)では「出づ」という動詞を用いており、又(3)のように「落つ」だけではなく、「積もる」と言う動詞を複合させて表現している。そのような時代の中にあって、伊勢は涙が出る現象をどう表現しているのだろうか。そこで次の〔A〕の歌に注目してみたい。

〔A〕

おなじころ（Ⅱ・Ⅲナシ）
しがらみにそでをかからめどせきとめず（Ⅱかくせ・Ⅲとむれ）こぼるるものは（Ⅱなか）
なみだなりけり　（伊勢集一二七／伊勢Ⅱ・Ⅲ一四二）

現代人の我々からすると「涙がこぼれる」という表現は、日常よく耳にするフレーズであるが為に、一見すると目新しく映らないのだが、この表現は『万葉集』には存在せず、伊勢の時代に探してみても、いくつかの問題点（これは後ほど検証する）を除けば皆無と言ってよい。従来の類型的表現からすれば、Ⅱ系統の「流るる」が妥当なのだが、片桐洋一氏[7]によれば、Ⅱ系統はⅠ系統とⅢ系統の接触によって出来上がった本文であると主張されている。それに従って考えていくと、Ⅱ系統の本文は転写の際に類型的表現に傾倒する形で書写した変形本文と考えられる。そこで、現代にまで継承されている「涙がこぼれる」という表現は、伊勢を以て嚆矢とするのではないかと想像してみたくなるのである。

そこで先ず「こぼる」という動詞を抽出していくと、『万葉集』には、

小墾田之（そはりだの）　板田乃橋之（いただのはしの）　壊者（こほれなば）　従桁将去（けたよりゆかむ）　莫恋吾妹（なこひそわぎも）
（万葉集・巻十一・二六五二）

という歌が存在し、「壊れ崩れる」という意味で使われている。三代集においては『古今集』に用例はなく、『後撰集』『拾遺集』に一例ずつ存在している。

（題しらず）　素性法師

(1)むめの花をればこぼれぬわが袖ににほひかうつせ家づとにせん　（後撰集・春上・二八）

菅家万葉集の中　（よみ人しらず）

(2)浅緑のべの霞はつつめどもこぼれてにほふ花ざくらかな　（拾遺集・春・四〇）

(1)は「花が落ち散る」、(2)は「あふれでる」という意味あいで使われており、「涙」と直接結合する歌は見られない。

先程万葉歌で確認をしたように「こぼる」には「壊れる」という意味があったわけだが、それが何故「涙」と結びつくのであろうか。そこで「涙がこぼれる」時とはどのような時なのかを考えてみたい。涙を誘う悲しみが大きければ大きい程、感情はますます高揚し、自分ではその感情をどうにも抑えきることが出来ず、目の淵に溜まりに溜まった涙が堰を切ったように流れ出る時のことを言うのだろう。そう考えてみると「涙」という語に、「こぼる」という動詞を選択したことは、その様子を的確に表現していると言える。裏を返して言えば、既成の表現方法では自分のこの深い悲しみは訴えきれないという伊勢の思いをひしひしと感じないではいられないのである。

この表現は伊尹に引き継がれ、

からころもそでに人めはつつめどもこぼるるものはなみだなりけり　（一条摂政御集・四）

という歌に結実された。四・五句目は伊勢歌と全く同じで、「こぼるる涙」といった今までにない斬新且つ的確な表現に触発され、伊尹が摂取したものだといえるだろう。ちなみに小林氏の調査によると、「涙こぼる」という表現は「和文語的表現」であるが故に、日記・物語類では中古より頻繁に登場してくるが、和歌類において中古には一例もなく、中世以降に登場しはじめるのだという。それは和文語と歌語の区別がそれほど厳密ではなくなり、「涙こぼる」という和文語的表現を取り入れるようになったためだとしている。しかし、平安私家集を眺めてみると、伊勢を始めとし、伊尹や馬内侍・俊頼などの十数例が抽出可能であることを付け加えておきたい。

このように一つ一つ確認をとっていくうちに『人麿集』にも、

ひぜんちくごか、無歌

人をこひせめて涙のこぼるればこれたがかたのそでぞぬれける　（人丸集一九三／人麿Ⅱ六三六）

という歌が入集しており、このことは伊勢歌よりも先行する例ではないかと疑念を抱かせた。『人麿集』においてこの歌が存在する歌群に関しては、久曽神昇氏[8]や後藤利雄氏[9]等をはじめとする先達の研究により、物名歌を得意とする歌人・藤原輔相の作による歌群であることが判明している。しかし、輔相自身に問題が多く、『古今集』歌人（つまり伊勢とは同時代の歌人）と見做すか、天暦期の歌人と見做すか決し難いところがある。万一、『古今集』歌人だとしても、この歌が人口に膾炙した形跡がないことから、伊勢が輔相の歌に影響を受けた事は認め難く、また前述した如く伊尹歌は明らかに伊勢歌の影響下にあって詠作されたことが理解できるので、やはり「涙こぼる」は伊勢の独自性に富む表現であると言ってよさそうだ。[10]

さてそのことをより確実にするためにもう一つ明確にしておかなければならない問題点がある。それは小林氏の調査から『伊勢物語』第六十二段の本文中、

「などいらへもせぬ」といへば、「涙のこぼるるに目も見えず、ものもいはれず」といふ。

に見えるように、ここにも「涙こぼる」が登場してきているという点だ。『伊勢物語』の成立は片桐洋一氏[11]の『伊勢物語』成長論に則って考えてみると、章段中の和歌が『古今集』に業平歌として採歌されており、且つ『在中将集』・雅平本『業平集』にその歌が入集している場合、『古今集』編纂当時までに成立した章段ということになり、伊勢生存期と重なるわけである。つまり『人麿集』歌と同様に「涙こぼれる」が伊勢歌より先行するか否かが問題となるわけだ。続いて、『古今集』にはあるが両『業平集』はその歌が入集していなければ、『後撰集』編纂時期を余り下らないころまでに書き加えられた章段であり、『古今集』にも両『業平集』にも歌がない章段

はそのあとに増補された章段ということになるそうだ。この六十二段の歌は『古今集』にも両『業平集』にも歌がない章段なので、伊勢没後に成立したものといえる。よって「涙こぼる」という表現の嚆矢を辿れば、やはり伊勢の「しがらみに」の歌に帰着するのである。つまり、「涙がこぼれる」という表現を普遍的なものとして定着させたのは、「涙」に対する鋭い観察力と愛着を持った伊勢であったと結論づけてよさそうである。

四、溺れるほどの涙

(1)朝日弓流　佐太乃岡辺尓　群居乍　吾等哭涙　息時毛無

山口女王贈大伴宿祢家持歌一首

(2)秋芽子尓　置有露乃　風吹而　落涙者　留不勝都毛

(万葉集・巻八・一六二一)

『万葉集』時代には「やむときもなし」「とどめかねつも」というように、留めようもなく流れ出る涙を以てその量の多さを表現する。又、誇張表現としては、

霊亀元年歳次乙卯秋九月志貴親王薨時作歌一首 并短歌

(3)・・・玉桙之　道来人乃　泣涙　霖霖尓落者　白妙之衣泥漬而・・・

(万葉集・巻二・二三〇)

七年乙亥大伴坂上郎女悲嘆尼理願死去作歌一首 并短歌

(4)・・・衣袖不干　嘆乍　吾泣涙　有間山　雲居軽引雨尓零寸八

(万葉集・巻三・四六三)

のように雨に見立てる方法が取られているが、この方法は『古今集』時代になると

(5)くりかへし我がみをわけてなみだこそ秋のしぐれにおとらざりけれ

(是貞親王家歌合・二〇)

たゝみね

(6)身をしれはおつるなみたはあはれなり春のなかめはつねのふること

(躬恒Ⅲ・二四一)

のように単なる雨ではなく「秋の時雨」や「春の長雨」等のようにより複雑化(12)してくるのである。このような類型的表現のなかで伊勢は涙が多く流れ出ることをどの様に表現しているのであろうか。

〔B〕

(Ⅱ・Ⅲナシ)
かへし

さらばよとわかれし(Ⅱ・Ⅲ時)ほどにいはませばわれもなみだにおぼほれ(Ⅲましを)なまし

(伊勢集・Ⅱ二六四／伊勢Ⅲ二六六)

「いつまた会えるか分からないと別れのときにもし言ったならば、私もあなたと同じように溢れ出る涙に溺れたでしょうに」と、流れ出る涙の量の多さで我が身が溺れてしまうという誇張表現が施されている。このように「涙に溺れる」とい

う表現は古今集時代には他に例を見ず、伊勢に続く歌として、

内侍もうせてのち、人のもとに

(1)ひきかくるなみだにいとどおぼほれてあまのかりける物もいはれず　（和泉式部集・五〇六）

修理大夫顕季のなぎさの院にて恋の心を

(2)あはれてふ人も涙におぼほれてともしき袖をくたしはてつる　（散木奇歌集・一二一〇）

等が挙げられるが、先ずは和泉式部の詠作まで待たねばならなかった。この事実は和泉式部が伊勢歌を意識した歌作りの一面を窺わせる証左にもなり、また伊勢が後世の女流作家に多大なる影響を与えたとする諸氏の見解[13]を以てすれば当然の結果とも言える。また、(2)に挙げたように、俗語などを取り入れ、革新的和歌を追求した俊頼がこの表現を用いている辺りから察すれば、伊勢が「涙におぼほる」と詠んだ当時は恐らく新奇な印象を与えた歌だったのではないかと思われる。

ここでもう一つ涙が多く流れ出ることを表現した歌を見ておきたい。

〔C〕

（亭子院歌合時）

あふことの君にたえにし我がみより（Ⅱ・Ⅲいくら）いくそ（Ⅲ出ぬ）のなみだながれいづらん

（伊勢集一〇五／伊勢Ⅱ一〇七／伊勢Ⅲ一〇三）

「あなたに会うことが途絶えてしまったために我が身からは多くの涙が流れ出るのだろう」と、一見変哲もない様に思われる歌だが、ここでは歌中の「いくそ」という語に注目してみたいのである。この箇所はⅡ・Ⅲ系統と出典の亭子院歌合の本文では「いくら」となっており、どちらとも決めがたいところではあるが、「沢山」という意味を表すことに変わりはなく、また両者とも和歌で用いられる数が少ない言葉である。そもそも「いくら」の用例は、

題しらず　よみ人しらず

(1)むばたまのやみのうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり　（古今集・恋三・六四七）

返し　（よみ人しらず）

(2)おき所なき思ひとしききつれば我にいくらもあらじとぞ思ふ　（後撰集・恋六・一〇五三）

のように『古今集』『後撰集』には各一例ずつしかない。それに加え、下に打ち消し表現を伴った形で「どれほども～ない・たいして～ない」という構文を作っているのだ。その中にあって、伊勢歌は「いくら」を打消と呼応させず用いており、僅かながらも、珍しい例と言えるだろう。また「いくそ」は「いくら」以上に用例が限られ、『古今集』には一例もなく、『後撰集』に仲平歌の一例、

おなじ御時、きたのの行幸にみこしをかにて　枇杷左大臣

みこしをかいくその世世に年をへてけふのみ行をまちて
みつらん
（後撰集・雑二・一一三二）

があるのみである。

伊勢の歌を読み解いていくと、前述した「さらばよ」などもその恰好の例ではあるが、歌言葉としてはいささか据わりの悪いものが出現し、解釈を難解にさせる一因を作っている。この「いくそ」も例外ではないのだが、反対の側面から見れば、それが伊勢歌の特徴のひとつなのだろう。伊勢が歌言葉としては奇抜なものを取り入れていくのは、そうすることで悲哀に満ちた心情を吐露しようとする姿勢があるからではないか。

五、枯れ果てる涙

人は悲しいが故に涙を流し、その涙は尽きる事がないのだというのが、表現の様々はあるにしても、『万葉集』以来パターン化された表現方法であった。しかし、我々は悲しみの余り泣きじゃくり、もう涙が出ないのではないかと言うほど泣いた時に「涙が枯れ果ててしまった」と表現する術を知っている。その発想を最初に和歌に取り入れたのもやはり涙にこだわる伊勢だったようだ。

〔D〕
女四宮かくれたまひてのち
（Ⅱへとふらひきこゆとて）
（Ⅲかくれさせ給へるとふらひきこえさすとて）
ここらよをきくがなかにもかなしきに人のなみだはは[11]
てやしぬらん
（伊勢集四四七／伊勢Ⅱ四五〇／伊勢Ⅲ三七八）

この歌は醍醐天皇第四皇女勤子内親王薨去の際に弔問歌として伊勢が詠んだ歌である。尽きることのない涙を詠む当時にあって、この逆転の発想はより深化した悲しみを当時としては斬新な表現で訴えるのであった。この歌は伊勢自身が流した涙ではないが、他人の悲しみにまで心を尽くす事が出来るのは涙の本性を身を以て悟っていたからに他ならい。やはりここでも〔A〕の歌と同様、現代においても支持され続ける表現の嚆矢が伊勢の歌にある。これは伊勢の涙に対する着眼点の鋭さを物語る。

六、水鏡としての涙

最後に涙そのものを詠み込むというよりも、その特性を生かし詠作された歌を見たいと思う。

伊勢の歌の中に

あひにあひて物おもふときのわがそではやどる月さへぬ
るるかほなる
（伊勢集・二〇八）

という歌があるが、『全釈』などにも指摘がなされている[14]ように、「ぬるる顔」とは伊勢が創作した言葉であり、『新古今集』歌人たちに影響を与えた歌としてよく知られている。本

稿は「涙」と言う語そのものに注目をしているため、このような秀歌を拾う機会がないことを断っておくが、この歌を引き合いに出したのは以下に示す三首がこの歌と同様、涙が水鏡としての役割を担っているからである。

〔E〕
秋の月ひとへにあかぬものならばなみだをこめてやどしてぞみる
（Ⅱひとと）（Ⅱ|Ⅲれ）（Ⅱため・Ⅲとめ）（Ⅱ・Ⅲうつ）
（伊勢集・Ⅲ三〇二／伊勢Ⅱ三〇〇）

この歌は「あひにあひて」歌と同様、袖に溜めた涙に秋の月を映すという趣向の歌である。ここの涙は悲しみの涙というよりは『全釈』が指摘する如く題詠風の印象を受ける歌だ。ただ涙に月が映るという歌の組み立ては、

（題しらず）　（よみ人しらず）
もみぢばにたまれるかりのなみだには月の影こそ移るべらなれ
（後撰集・秋下・四一二）

という歌にも見られ、伊勢独自の表現手法であったかどうかは断定し兼ねる。「雁の涙」は『古今集』時代に幾つかの用例が確認でき、類型的表現のひとつといえる。この「もみじばに」歌は、そこに「涙に月を映す」という伊勢の手法をヒントにして、パターン化された表現に工夫を施した形で詠出されたのではないかと考えたいところではある。がしかし、ここは取り敢えず、〔E〕の歌には伊勢独自の発想の可能性が十分にあるという程度にとどめて次の歌を見ることにしよう。

〔F〕
なくなりにける人のいへにまかりて、あしたにかしこの人につかはしし（Ⅲける）
なき人の影だにみえぬやりみづにそこになみだをながしてぞこし
（伊勢集四六九／Ⅱ四五二／Ⅲ三八二）

「亡くなった人の影さえ映らない遣水の底に私は悲しみの涙を流してきた」と言う歌であるが、ここでは月ではなく、人を映す鏡としての役割を担っている。また〔C〕の歌を考察したときにも触れたのだが、歌言葉としては熟していないものを取り入れていく姿勢が伊勢にはある事を指摘した。「遣水」も同様で、八代集の中にはこの伊勢の歌一首しかなく、その姿勢を再度確認できる歌でもある。

〔G〕
かへし
ふるるみはなみだのかはにみゆればやながらのはしにあやまたるらん
（Ⅱなか・注記ア「中」）
（伊勢集・Ⅲ三一三／Ⅱ三一二）

温子が宇多天皇の出家により、残された我が身を長柄の橋にたとえ、悲嘆にくれている歌を伊勢に送って寄越し、それに対して答えた歌である。伊勢は温子が流す涙の河の中に私が映り、それが長柄の橋に見誤られたのでしょうと慰めている。多く流れ出る涙を河に見立てる手法は『古今集』以降急増するが、その様な類型的表現のなかにも涙にこだわる歌人としての工夫が隠見する。

『古今集』時代には水に映る像を詠み込む例は多く、中でも、

みなそこのつきのうへよりこぐふねのさをにさはるはかつらなるらし　（土左日記・二〇）

という貫之歌は周知のとおり、その代表例といってよいだろう。貫之が水に映る像を特に好んだことは平沢竜介氏[15]が詳細に論じており、同時代歌人達の中でも貫之が特に高い割合で水に映る像を詠み込んでいるという事実を次のように考察する。「水はある事実の像を示しているが、それは事実そのものではなく、その事実の映像であるにすぎない。それと同様、言葉もある事柄や事物を表すが、それは言葉自体がそれらの事柄や事物であるからではなく、それらの事柄や事物のイメージを担っているにすぎない」とし、その言葉の特性を貫之がどの歌人よりも強く意識していたからだとする。その反面、歌における抒情性の欠落が避けられないとも指摘されている。思うに貫之は言葉そのものを実感するよりも、自己と対峙させ客観的視点で捉えていたわけで、それがつまり山下道代氏[16]に「貫之に詩人を感ずるよりも、職人的な歌よみを感ずる」と言わしめたのではないか。また久富木原玲氏[17]は、

京極院に亭子みかどおはしまして花の宴せさせたまふに、まゐれとおほせらるれば、みにまゐれり、いけに花ちれり

としごとに花のかがみとなるみづはちりかかるをやくもるといふらん　（伊勢集・九七）

という歌の「花のかがみ」に伊勢の独自表現を認め、優雅さを失わない伊勢歌に対して、同じく水に映る像を詠んだ貫之歌を「理屈っぽい」と述べている。つまり、伊勢は言葉を感情の発露として捉えていく歌人なのではないか。だから片桐洋一氏[18]も指摘している如く「自らの思いをしみじみと、かつ美しく詠みなす伊勢の和歌作法に『涙』が適して」いたのだろうと思われる。

七、伊勢の歌―まとめにかえて―

伊勢の「涙」詠を通して、伊勢歌の表現の特性を考察してきたが、最後に伊勢が「涙」に執着する理由をまとめておきたい。勿論前述した如く、伊勢にとって言葉は自己内部の発露として存在するのだが、とりわけ「涙」を選択した背景には、伊勢の生きざまとリンクさせて考える必要がある。伊勢の半生は『伊勢集』冒頭の物語的部分を中心にして浮かび上がってくるものしかないのだが、決して不幸の連続という人生ではない。しかし、事ある毎に遠慮容赦無く襲い来る悲しみや苦悩の大きさは、伊勢自身をも潰しかねない程のものだったに違いない。そこで伊勢は涙を流すことで、その悲しみや苦悩を浄化させ、自己を立て直していこうと努めたのではないか。だから彼女にとって「涙」は重要なキーワードで

あり、その言葉を如何にうまく詠出するかということが、悲しみを浄化させ、自分を取り戻していくエネルギーになっていったのだろう。そのことが「涙」というありふれた歌語に豊かさを与え、現代にも繋がる表現が生まれてきたと言ってよいのではないか。

伊勢は晴の歌人としてクローズアップされがちだが、このように見てくると、伊勢の歌の原点は自分というものを見失わず生きていくが為に歌を作っていくのだという点にあり、それは言ってみれば、究極的な褻の歌であるといえるだろう。

以上伊勢の歌に登場する「涙」の独自表現を考察し、伊勢における「涙」の役割を考えることで伊勢歌の内実にまで言及してみた。

注

(1) 平野由紀子他『新日本古典文学大系28平安私家集』(岩波書店＝平6・12)

(2) 関根慶子・山下道代『私家集全釈叢書18伊勢集全釈』(風間書房＝平8・2)

(3) 私家集によっては他人詠を含むものがある。『伊勢集』においても四十七首中伊勢詠歌と確定できるのは四十首。それでも「涙」詠は当時にあって群を抜いている。

(4) 佐々木民夫「『万葉集』の涙の歌」(『山形女子短期大学紀要』10＝昭53・10)

(5) 神谷かをる「『涙』のイメジャリー万葉集から古今集へ―」(『国語語彙史の研究』13所収、和泉書院＝平5・7)

(6) 小林澄子「古代における『涙』をめぐる動詞について」(『文藝研究』一〇六＝昭59・5)

(7) 氏によれば、Ⅱ系統はⅠ系統とⅢ系統の接触によって出来上がった本文であるという。(↓『日本古典文学大辞典』(岩波書店＝昭58・10)の『伊勢集』の項目、『日本の作家7伊勢』(新典社＝昭60・8)＊三九～四〇頁。)

また定家本系統を尊重したほうがよいと徳原茂実氏、妹尾好信氏等から提言されている。

(8) 久曽神昇『三十六人集』(塙書房＝昭35・1)＊一五七頁。

(9) 後藤利雄『人麿の歌集とその成立』(至文堂＝昭36・10)＊一九六～一九七頁。

(10) 『和歌大辞典』(明治書院＝昭61・3)の「輔相」(執筆担当＝山口博)によれば、「寛平～延喜(八八九～九二三)の人とする説もあるが、書陵部蔵『源順集』(『続小草内和歌』と内題)の増補部分物名歌の詞書から天暦(九四六～九五七)の歌人と考えられる」とある。輔相を天暦期の歌人と考える立場は他に、小町谷照彦氏(『平安時代史事典』(角川書店＝平6・4)の『輔相集』の項)・阪口和子氏(『新編国歌大観』第三巻の『藤六集』解題)らがおり、『藤六集』に入集の『古今集』九三五歌(雑下)、

(題しらず)　(よみ人しらず)

雁のくる峰の朝霧はれずのみ思ひつきせぬ世中のうさ

を明らかに他人作であると指摘する。逆にこの歌を根拠にするとともに、家集巻軸の歌の詞書に「とさのかみなる人」が貫之を指すと考えると、延喜初年(九〇一～)頃から歌人として相当の地

位にあったと木越隆氏（『日本古典文学大辞典』の「藤原輔相」の項）は述べられ、また片桐洋一氏（『冷泉家時雨亭叢書17平安私家集四』（朝日新聞社＝平8・12）の『藤六集』解題）は輔相の父弘経の同母兄の高経と同母弟の清経の没した年と年齢から推測して輔相が『古今集』に選ばれるにふさわしい年齢であったとし、あまりの卑官のため「よみ人しらず」として入集したと見ている。『平安時代史事典』の輔相の父「藤原弘経」の項目（執筆担当＝関口力）には生没年を八三九～八三年としており、輔相が弘経晩年の子供であったとしても、『古今集』撰集時期には二十歳を越えており、片桐氏の言うように『古今集』に選ばれても何ら不思議はない。しかし、木越氏が述べるように歌人として相当の地位にあったかは疑問であり、『古今集』の物名歌には採歌されていないところを見れば、物名歌人として認められるのは『古今集』以後のことであろう。仮に同時代歌人だとしても、その多くの物名歌の一首中に含まれる「涙のこぼる」という表現に伊勢が触発されたとは考えがたく、伊勢歌における「涙」の役割を考え合わせれば、「涙こぼる」表現は伊勢に帰着させてよいのではないかと思われる。

(11) 片桐洋一『伊勢物語の研究〔研究篇〕』（明治書院＝昭43・2）。特に六十二段の成立に係わる記述として、二三五～二三六頁、二五〇頁が挙げられる。本文引用は日本古典文学全集に拠る。

(12) 伊勢の歌の中にも勿論「涙」を雨に見立てた歌があり、

　　我がごとや雲のなかにもおもふらんあめもなみだもふりにこそふれ　　（伊勢集・一八二）

などは単に涙を雨に見立てただけではなく、関根・山下両氏の『全釈』によれば、「同じ言葉を重ねて、いよいよその程度が強くなる」事を表現し、それを「係結びで強める」というように独自表現だけでなく類型的表現の中にも単なる見立てで終わらせないという伊勢の「涙」に対する執着を垣間見る一首である。

(13) 関根慶子「伊勢」（『日本歌人講座中古の歌人』所収、弘文堂＝昭43・11）の二六〇頁。中田武司「伊勢」（『国文学　解釈と鑑賞』51―11、至文堂＝昭61・11）等。

(14) 片桐氏は『日本の作家7伊勢』（＊二一三～二一四頁）の中でこの歌が『源氏物語』に引歌として使われていることを指摘し、当時にあって誰もがこの歌を知っていたという。

(15) 平沢竜介「貫之」（『和歌文学論集2古今集とその前後』所収、風間書房＝平6・10）

(16) 山下道代『王朝歌人・伊勢』（筑摩書房＝平2・12）＊二四二頁。

(17) 「歌人伊勢・その詠歌の特色をめぐって」（『和歌文学論集2古今集とその前後』所収、風間書房＝平6・10）

(18) 片桐洋一『日本の作家7伊勢』＊一九六頁。

※和歌の引用は特に注を施さない限り『新編国歌大観』に拠る。但し、私家集については『私家集大成』に拠る場合はその略語で、『新編国歌大観』に拠る場合は「―集」で示す。

付記

本稿は平成九年度和歌文学会第四十三回大会（於・藤女子大学）における口頭発表をまとめたものである。席上、又終了後にご教示を賜った諸先生方に心より御礼申し上げます。また、発表に至るまでを支えてくださいました武井和人氏をはじめとする、諸氏に感謝いたします。

（かとう・ゆういち　本学大学院博士後期課程）